



★次回札幌で見られる日食は「金環日食」

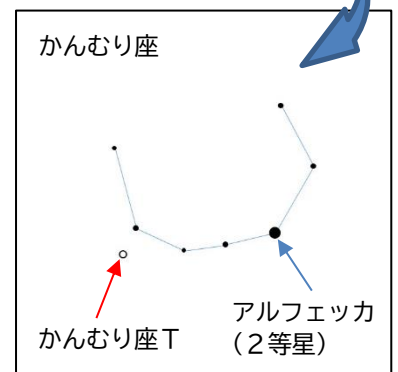
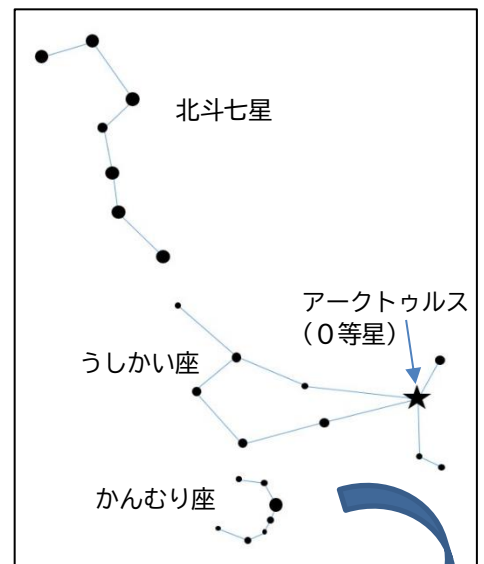
日本時間4月9日未明に北米大陸で皆既日食が見られました。ニュースでは「今後皆既日食が日本で見られるのは2035年」とも紹介されていましたが、見られる地域は北陸～北関東で、札幌では約8割が欠ける部分日食になります。札幌で見られた直近の日食は2020年6月(部分日食)でした。その後10年間も日食は見られず、次回は2030年6月1日夕方です。でもそれは「金環日食」*1と呼ばれるもので、札幌を含め多くの北海道の地域でも見られます。2030年は札幌にオリンピックも新幹線も来ないけれど、世界中から金環日食を見に来る人々を迎えて盛り上がるとういすね。ちょっと早いけれど準備を始めましょうか。

*1 月の見かけの大きさが太陽よりも小さいため、月が太陽を完全に隠せず太陽が環の形に見える日食

★新星爆発が見られるか「かんむり座T」

かんむり座は東の空に見える時「逆さまのC字」形の星並びですが、2等星が1個で他は4等星以下なので札幌市内では分かりにくいかもしれません(右図上)。でもそこに2等星がもう1つ増えたらどうでしょうか？

かんむり座T(右図下)と名付けられた恒星は通常10等級程度で、小型の天体望遠鏡で観測できますが肉眼では見えません。しかし、1866年と1946年におよそ2等級まで爆発的に明るくなりました。周期約80年の再帰新星(さいきしんせい)*2で次回は2026年頃とされていますが、2023年2月頃から前兆が観測されたことから、同年6月30日ルイジアナ州立大学のBradley E. Schaeferさんらは今年2～9月の間で新星爆発が起こるとの予測を発表しました(国際天文学連合電子速報(ATel #16107))。ただし、2等級で輝く極大期は数日しかないと考えられるため、事前にかんむり座付近を見慣れておいてチャンスを逃さないようにする必要がありますね。



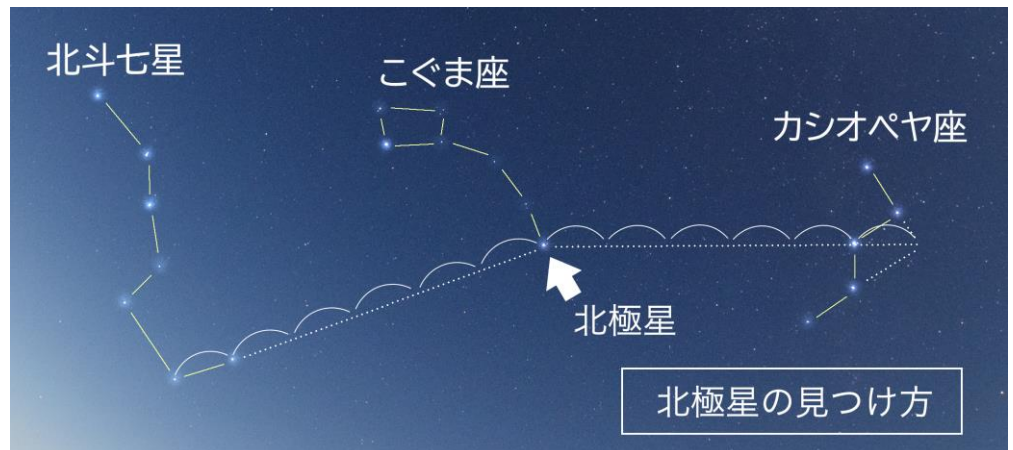
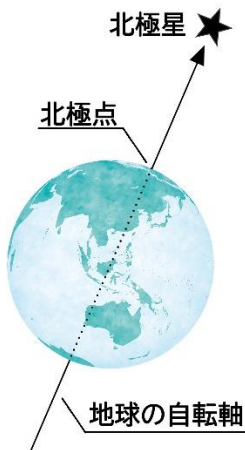
*2 「新星」とは、恒星が数日程度で急激に明るくなり、その後だんだん暗くなって元の明るさに戻る現象です。その正体は白色矮星(わいせい)を含む近接連星で、かんむり座Tの場合は赤色巨星と白色矮星の連星です。赤色巨星から流出した水素ガスが白色矮星の表面にたまり、限界を超えると核融合爆発を起こして増光します。この時たまったガスは放出されますが、白色矮星自身は吹き飛ばずに残ります。その後新たに水素ガスがたまって限界を超えると再び爆発が起こるため新星は何度も繰り返す現象となり、その周期は通常数千年から数十万年とされています。かんむり座Tのように周期が短く新星現象が複数回観測されたものを「再帰新星」といい、回帰新星、反復新星、再発新星などとも呼ばれます。なお、「新星」と「超新星」は別物です。ややこしいですね。(布施 隆久)

★「ぼらりす」とは？ 北極星のことです

この機関紙のタイトルでもある「ポラリス」は北極星のことで、別名「ノーススター」または「ポールスター」とも呼ばれています。星座では、こぐま座のしっぽの先にあたる2等星です。

北極星は、地球の自転軸の北極側の延長上にあるので、季節や時刻を問わず、いつもほぼ同じ位置で輝きます。夜空の中ではそれほど明るい星ではありませんが、北の空に見える北斗七星やカシオペア座の並びをたどって見つけることができます。

星が見える夜に、ぜひ探してみてくださいね。



皆さんは、札幌の時計台や豊平館、赤れんが庁舎（現在改修工事中）のひさしに赤い星印がついていることをご存じでしょうか。これは、北極星をかたどった図案で、明治新政府が1869年

（明治2年）に開拓使を設け北海道の開拓に着手した時に考案したもので、開拓使関連の庁舎や製品のラベルに用いられました。当時から続くビール会社のラベルに残されているので、なじみのある方も多いことでしょう。

天文台のすぐ近くの豊平館にも赤い星印がついています。ぜひ訪問してみてください。

昔の人は、北の空に輝く北極星を目印にして北海道の開拓にあたったのでしょうか。私はいつも、これらの星印を見た時には夜空の北極星と当時の北海道に思いをはせています。

天文台から見る北極星も美しいですよ。 （横山明日香）



豊平館のひさしの赤い星印

☆5月の夜間公開（予約は不要です。公開時間内にお越しください。）

3（金祝）～5（日祝） 20～22時 春の星座

17（金）～19（日） 20～22時 月・春の星座

※休台日は7日（火）、13日（月）、20日（月）、27日（月）です。